

家型の作品群

岩瀬 卓也

研究の背景と目的

家型とは三角屋根を持つ建築の姿である。そして、家型は三角と四角を合わせた図として広く一般的に共有された家のイメージである。私が生まれ育った家もいわゆる家型の家であった。幼い頃からこのカタチに興味を抱いていたわけではなく、建築を学び始めて自分の設計やアイデアにこの家型が頻りに現れ、自分にとって家型とはなにかと考えるようになったことが本研究を行うきっかけである。本研究の目的は、古今東西、文化・時代を超えて家型が現れる理由を知る事、そしてこのカタチが広く共有されている理由を知る事であり、なによりも私自身が家型に魅かれる理由を知りたいことを旨とする。

家型の過去と現在

家型の過去について起源・西洋・日本・集落・近現代の区分のもと考察を行う。起源において家型はポンペイの壁画や田野の小屋等の起源説、バルテノン神殿の木造建築起源説から、勾配屋根の機能的な必然性はいつか象徴的な役割と不可分な関係となったと考えられる。西洋・日本において建築は、批評家S・ギーティオンによる定説(ギリシャまで彫刻的でありローマ中期から内部空間への関心が強まる)や、井上充夫の4つの発展段階の指摘(実体的傾向の強い彫塑的構成から絵画的構成を経て内部空間の表現を展開させ行動的な空間の構成を完成させる)のような様式の歴史の変遷を辿りながらも、いつの時代にも家型を発見することができる。集落に家型が集散的に現れる理由には、環境要因と民族的要因とが混在する。近現代においては、特にアルド・ロッシについて触れ「ロッシの建築のなかに強く現れる初源的(プライマリティ)なカタチは近代のあの差異づけられた幾何形態という以上に、心的な経験の転記であろう。」という富永謙の見解等からロッシの家型は人々の記憶の集積を象徴していると考えられる。

家型の現在について2000年以降の建築・デザイングッズ・現代アートの区分のもと考察を行う。2000年以降の建築においては①抽象化の加速②ミニマルな記号還元された姿③分割が生み出す新しい距離感④屋根面の役割を捉え直す家型⑤家型同士の隙間から生まれる非日常性に住む⑥家型の形状が空間分節に影響を与えるという五つの観点による分類から、空間構成の秩序や規則に家型を用いる姿勢が認められる。デザイングッズにおいて家型が様々な用途に適用される理由を二つ述べる。一つは家型が簡単な形態であることでデザイン展開しやすいという理由であり安定感のあるカタチは様々な用途に適用できるという形態的な観点によるものである。もう一つは家型が持っているイメージを反映させる為であり、小さな家型には共通してこじんまりとしたかわいらしさが感じられるという感覚的な観点によるものである。現代アートにおいて作家の「家」に対するイメージの懸隔に着目し作家にとっての家型について考察する。他者との交流の場、心的体験または状況を反映させる鏡のようなもの、遊びという行為を喚起させるカタチ、人の営みを表すもの、徹底的な客観描写のための被写体、世界の有様と個人的な有様とを繋ぐカタチ等、作家それぞれの認識は多様である。

家型の思想

家型の思想として文学と心理学に分類し考察を行なう。文学では、小説・詩・童謡等において様々な場面で家型を想像させる表現が読みとれる。また絵本において描かれる家のほとんどは家型である事からも、冒頭に述べた「家型は広く共有された家のイメージである」という事を証明する。

心理学ではフロイトの夢の象徴的表現を始めとし、特に家型の過去と現在の調査を根拠として人々がこのカタチを用い続けてきた理由及び自分自身が家型に魅かれる理由をユングの集合的無意識の概念から考える。フロイトはここには意識と無意識とがあり意識には社会的で文化的な意識があること指摘する。その後ユングは無意識の中に人類共通の部分があることを発見しそれを集合的無意識と名づけその働き方のパターンを元型と名づける。元型は直接的に知られることはできず象徴やイメージを通して明瞭になる。つまり集合的無意識は元型としての家型と直結したものであると考えることができ、家型はユングの集合的無意識という概念に属していると言わざるを得ない。よって家型とは私たちが持っている心のカタチであると同時に潜在的な記憶であり、それゆえに私も家型に魅かれるという考えに至る。

五つの現れ

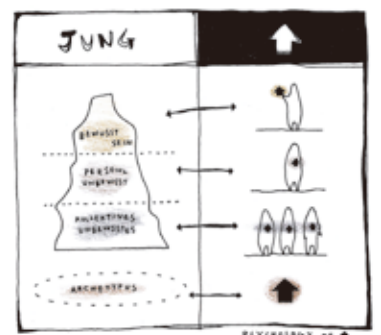
全5作品はユングの概念(集合的無意識)を立証する為に制作したものと云えるが、それぞれは個別のテーマに沿って作られており家型の現れ方用い方を重視したものである。



生まれ育った家



古今東西の家型



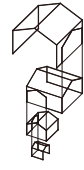
家型に魅かれる理由／ユング 集合的無意識



修了制作 / 家型の作品群

内外の家

ここでは家型がつくる内と外について再考する。この空間は四つの家型を入れ子状に90度回転配置した構成となっている。エントランスを空間の一番奥まった位置に設け、平面のおよそ半分を半屋外とすることで、内部と外部が入り組んだ平面を計画した。長い年月に渡って眺められ続けた家型を幾重にも重ね合わせるという弁証法的な行為によって、家型に内在する内外という関係をひと繋がり空間として止揚させる試みである。

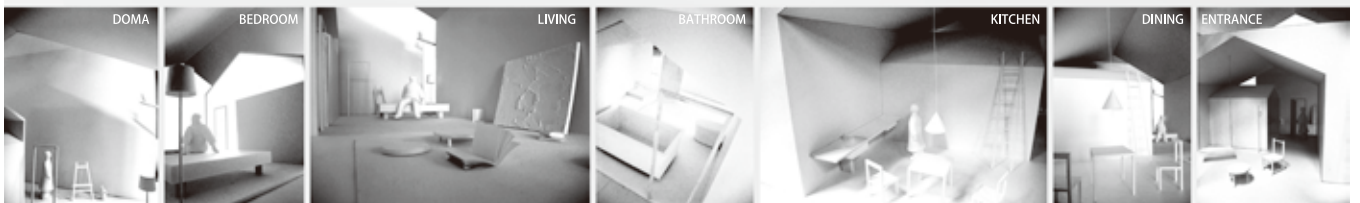
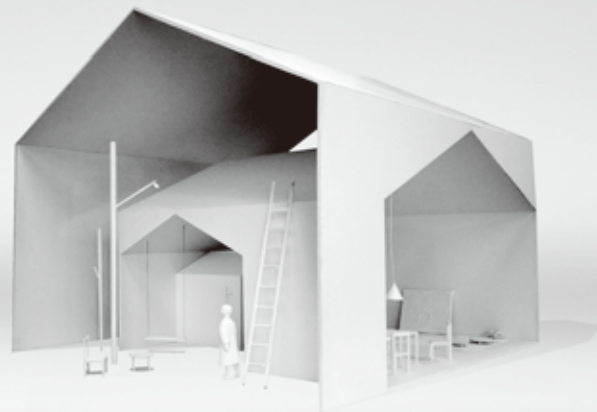


家型と既視感



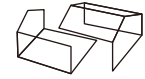
ずっと家の外 ずっと家中

内に居て外を感じる、ここは限りなく外に近い内である。「家型の内外」と「プラン上の内外」が混ざり合い、さらにプランの回遊と相まって内と外は反転し続けその境界は曖昧になる。重なりとズレの余白の空間には、曖昧で柔軟な住まいのカタチがある。



空土の家

ここでは、自然環境を再構築することを家型の新しい用い方として提案する。通常、空と土の間にある家は両者の関係を遮断する。そこで家型の7面を3と4に分け斜めにズラすことで家型にその関係を繋ぎ直す役割を与えた。内部空間においては、壁に囲われつつも大きく空に解放された空間が現れ、庭は地続きで室内まで広がる。あるいは内部から見る「空と土」を「床や天井」とみなすことも難しくない。空と土という身近なもの関係を繋ぎ直す家の実現を考えている。

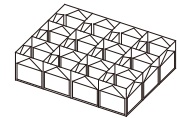


家型と再構築



お菓子の家

ここでは、童話ヘンゼルとグレーテルの物語を住宅として読み直す。プランには生活の為と物語の為の動線がある。お菓子をイメージさせる装飾を家型の三角部分に限定し、装飾や意匠への積極的なアプローチを試みる。白地の四角部分には住居空間としての快適性が保たれ、生活の色合いが施される。文字通りのお菓子でできた家ではなく、お菓子の家の持つイメージを家に表現する。みんなが知っている物語が住宅として機能し始める。



家型と童話



人と動物の家

ここでは、一本の木から森に至るまでを建築領域とし人と動物が分け隔てなく 集まれる場所をつくる。ここでの家型は人にとっても動物にとっても求心的であり得る「シンボル」として用いている。「目を覚ますと私は森の中に居てそこには沢山の 人と動物がいた。樹々の階段を上がり、本を読み声に耳を傾ける。どうやら話をしているのは人だけではないようだ。ここでは人と動物が同じ言葉を共有している。」一本の木と木の家の相似は、人と動物が話す共通言語の隠喩である。

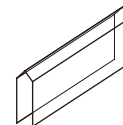


家型と求心性



二人の家

ここでは家型を不規則な平面や細く狭すぎる空間を家として認識する為に用いている。またここでの家型はそれぞれの育った町の風景を切り抜くためのフレームでもあり、趣味も性格も違う二人を繋ぐ唯一のよすがとしても用いている。向き合う事を促す細くて狭い空間の一端はAさんが生まれた海辺の町を、もう一端はBさんが育った都会の風景を切り取る。暮らし方が全く異なる二人がそのバランスとりを楽しむ家である。



家型と人となり

